

1. 研究の目的・背景

近年、魅力のある河川づくりという言葉が様々な河川整備に関連して使われるようになってきている。河川の魅力を高める要因としては自然、歴史、生活、文化などが考えられるが、そのような要素が古くから人々に親しまれてきたことを示す手がかりとして名所の存在が考えられる。本研究はこの名所をいかにして河川計画や地域計画の資源として活用するかを考察することを目的としている。ここでは名所を現在においてもその古くからの魅力を継承しているかもしくは、事実として多くの人々に親しまれている「現在の名所」、ある時代には名所として親しまれていたが何らかの要因によって現代ではその魅力が埋没してしまっている「過去に名所であった場所」、さらに過去には名所であった事実はないが、潜在的に名所になりうる場所を「将来に名所となる場所」と分類しそれぞれの景観の特徴について考察を加える。特に、過去もしくは現在において名所であった場所がなぜ名所たりうるのかを分析し、その成立要因を知ることができれば、それを基に、潜在的に名所になりうる場所を、何らかの整備によって名所化する方策が導けると思われる。

2. 研究対象地域と調査方法

本研究で扱う名所の定義は「景色・旧跡で名高い場所、かつその時代に生活している人の大多数が名所と認める場所」と仮に定義する。この定義では物理的かつ客観的にある地域を名所であるかどうか限定することは難しいが、名所の事例を分析するにあたっては、出版物に掲載されたという事実を一つの

Keyword: 親水計画、観光・余暇、公園・緑地、景観

*正会員 工修

**正会員 工博 埼玉大学工学部建設工学科教授

***正会員 Ph.D 埼玉大学工学部建設工学科助手

〒338-8570 埼玉県さいたま市下大久保 255

TEL: 048-858-9549 FAX: 048-858-7374

目安と考え、文献調査を実施した。調査した時代は江戸時代、明治時代、昭和 30 年代、現在と区分される。(表 1 参照) 研究対象地域は、多摩川下流域である河口から 22.2km の区間(右岸側:川崎市、左岸側:東京都大田区、世田谷区)とする。この地域を採用する理由であるが、河川整備に関する考え方が先進的であり、交通の要所である東海道、甲州道に交わること、氾濫が多いため治水・利水に関する史跡が多いなど、名所の問題を考える上で都市、自然、歴史に関わる要因についてバランスのとれたサンプルが得られるからである。

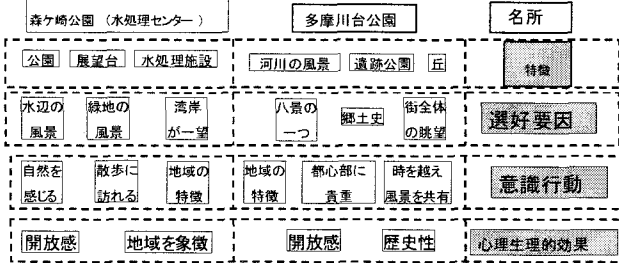
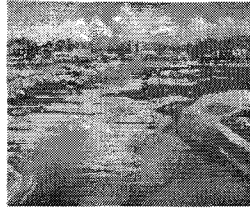
時代区分	名所数	参考文献
江戸時代	20ヶ所	「江戸名所図会」「武蔵名勝図会」 「浮世絵体系」「新編武蔵風土記稿」
明治時代	47ヶ所	「東京近郊名所図会」
昭和30年代	80ヶ所	「新川崎風物詩」「世田谷区史」「世田谷区概史」
現在	90ヶ所	「川崎百景」「世田谷百景」 「新大田百景」「多摩川八景・50景」

表1 調査した年代と使用文献

3. 名所の成立条件

名所の成立は歴史、季節・歳時などの成立要因が組み合わさることにより説明できると仮定し、名所を訪れる人が名所をどのような場所ととらえているのかを様々な文献における記述をもとに考察した。この要因を抽出するにあたっては、考えうる要因群を「名所」「特徴」「選好要因」「意識・行動」「心理・生理的効果」と段階的に分類して書き出し、それによって、表1の名所、計237個について価値、意味、性質の違いを表現することができた。図1はその例である。「森ヶ崎公園」は「公園」「展望台」「水処理施設」が特徴的な要素であり、「水辺の風景」「緑地の風景」「一望できる湾岸風景」などの選好要因に惹きつけられ人々は訪れる。また、「多摩川台公園」は「河川の風景」「遺跡公園」「丘」を特徴とし、「多摩川八景の一つ」「郷土史」「街全体の眺望」という選好要因に人々は惹きつけられる。同じ河川付近にある緑地公園でも、以上のように「選好要因」「意識・行動」「心理・生理的効果」の要因群を使うことによって違いを明確に表現できる。

また名所の成立にはこれらの要因のいずれかのみ



a: 盛んであった産業の回想
「かつて盛んであった産業を懐かしむ」「(繁栄) 当時の風景回想」
b: 治水・災害
「治水事業、災害に関係する事件など」
c: 土地の歴史
「場所・土地の歴史」「開発建設の様子・過程」「地形の変遷」
d: 現在の街の基盤的
「現在の街の繁栄させた施設」「役目を終えたかつて治水・街道・堤の施設」
e: 現在の産業・生活
「現在の地域・産業、生活の特徴を表現している」「他の地域にない風景」
f: 施設・建築物の魅力
「施設、建物(構造物)の外観の魅力」「歴史(土木史)的価値」
g: 風景の眺望
「見渡せる風景」「地域の自然(地形)」「街全体の眺望」「背景の丘陵地」
h: 歳時的イベント
「河川での祭り」「郷土・季節・歳時」
i: レクリエーション
「レクリエーション・スポーツ・遊び」
j: 自然に親しむ
「緑地・水辺の風景」「回遊性の風景」「公園の風景」
k: 周囲の風景
「町並み」「施設周辺の風景」

表2 成立要因の分類

が卓越しているというよりは、その要因の組み合わせが本質的に重要である可能性がある。したがって、実際に名所として認知されている場所に関する各要因についてその相互関係を調べることにした。「選好要因」「意識・行動」「心理・生理的效果」を1組の成立要因と考え、表2を基にa~kに分類した(表3)。相互関係について言える事は、名所の成立要因には、「g: 風景の眺望」(表3)のように、他の要因と組み合わせやすい性質の成立要因と、「b: 治水・災害」のように、他の成立と組み合わせにくい性質の成立要因(表3)があることがわかる。組み合わせの多いものは「c: 土地の歴史」「j: 自然に親しむ」は河川と人の生活との関わりがあるもの、「f: 施設・建築物の魅力」「g: 風景の眺望」など場所の景色としての魅力を示すものが挙げられる。

4. 名所の空間構成に関する考察

(1) 空間構成の分類

名所成立要因のうち、歴史的イベントや季節などの要素はデザイン上操作するポイントにはなりにくい。河川関連整備において有効な操作ができるとすれば、それは空間要因である。したがって様々な成立要因のうち、特に名所周辺の空間構成に着目し、研究対象地である都市河川の特徴を考慮し7つの型に分類を行った(図2)。ここでは名所を視対象、名所を訪れる人が立つ場所を視点場と考え、視点場、視対象の位置関係と本川、支流、街道、丘陵などの立地条件から分類した。E、F、G型は視点場と視

要素	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	個数	組合せ数
a: 盛んであった産業の回想	3										1	4	1
b: 治水・災害		7	3			1	1	3				15	4
c: 土地の歴史			3	5	4	1	2	5	1		9	5	35
d: 現在の街の基盤的				4	1	3	1				3	1	13
e: 現在の産業・生活					1					1	1	3	2
f: 施設・建築物の魅力			1	2	3	6	3			6	8	29	6
g: 風景の眺望			1	5	1	3	5	1	2	6	1	25	8
h: 歳時的イベント				1				1		4		6	4
i: レクリエーション						3			2	1	2	8	3
j: 自然に親しむ			1	9	3	1	6	6	4	2	6	1	39
k: 周囲の風景			1	6	1	1	8	1		1		19	6

表3 名所成立要因の組み合わせ

対象間の距離が大きい型である。また、視対象を、自然物、人工物などの性質の違いと規模の違いから、1~11まで番号をつけ区別した(表4)。

(2) 空間構成別の名所数の変遷

名所成立要因のうち空間構成要因に限ってみたとしても、それはいつの時代にも常に共通して有効であるとは限らず、多くは時代ごとの社会的背景の影響下にある。江戸時代で名所として描かれている河川の背景に見られる丘陵などは、都市開発の影響で魅力を失い、同じ空間型でも、時代によって名所と成立しない場所も見られる。したがってすべての名所サンプルから単純に空間構成要因を見るのではなく、時間的変遷を見る必要がある。表5は(1)で空間構成ごとに分類した名所数を、時代ごとに集計した表である。構成比の変遷を見ると、視対象と視点場間の距離が小さくかつ河川本川に近い位置にあるA、B型は常に一定の割合で名所として選ばれている。視対象と視点場の距離は小さいが、河川本川との距離の大きいC、D型は、全体に占める割合は小さいが増加する傾向にある。また、視対象と視点場の距離が大きいE、F型は割合が小さい。G型は

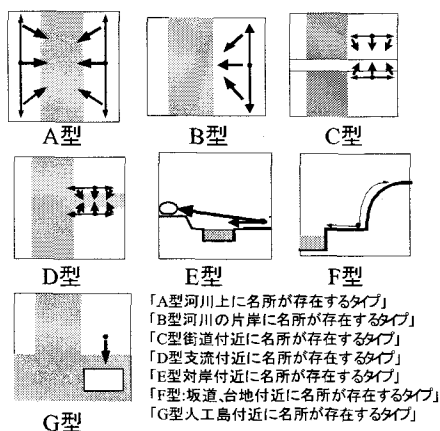


図2 空間構成の類型

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
視対象	橋	高層建築物	建築物	神社・祠	森林・樹木等	小川・用水	公園・緑地	河川本川	堤内地	街道	遠景

表4 視対象の番号

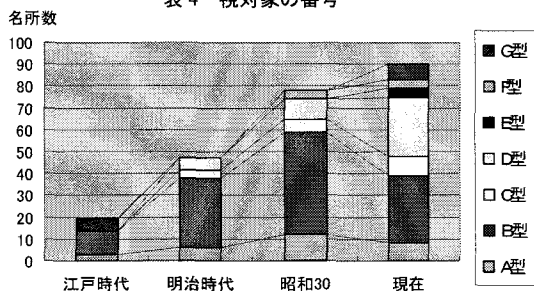


表5 空間構成型別名所数の変遷

湾岸地域の開発によりできた新しい空間構成型である点場間の距離が小さくかつ河川本川に近い位置にあるため、「現在」にのみ見られる。

(3)空間構成別の視対象の変遷

表6は空間構成別の視対象の変遷を集計したものである。全体を通して、以下の3点が表からわかる。

- ・空間構成により、視対象は限定される傾向がある。
- ・「3:建築物」など人工的視対象は、河川風景など場所の資質と組み合わせり名所となることがわかる。
- ・治水に苦勞した地域であるため、当時を祀る「4:神社・祠」は時代に関係なく名所となることが多い。

また、河川本川に近くに位置し、4つの時代区分を通して占める割合の大きいB型では、次のような特徴があった(表7)。「4:神社・祠」はどの時代にも占める割合が大きい。また、河川の資質に関わる「5:森林・樹木等」「8:河川本川」などの視対象に「1:

空間構成	時代	1橋	2高建	3建	4神社	5森林	6小川	7公緑	8河川	9堤内	10街道	11遠景
A型	江戸	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0
	明治	2	1	0	0	4	0	0	1	0	0	0
	昭30	11	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	現在	3	4	0	0	2	2	0	1	0	0	0
B型	江戸	0	0	0	7	2	0	0	1	2	0	0
	明治	0	0	7	2	2	0	0	1	2	0	0
	昭30	0	15	8	7	5	3	2	2	6	0	0
	現在	0	5	3	10	5	2	4	3	2	0	1
C型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	1	2	0	1	0	0	0	0	1	2	0
	昭30	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3	0
	現在	2	0	0	2	2	0	1	0	0	4	0
D型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	0	0	1	1	0	0	2	3	0	0
	昭30	0	0	1	2	2	0	4	2	3	0	0
	現在	1	0	6	4	8	1	8	6	6	0	0
E型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	現在	0	0	0	0	1	0	1	3	0	0	0
F型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭30	0	0	0	1	0	0	0	4	0	1	3
	現在	0	0	0	1	0	0	0	2	2	1	3
G型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	現在	1	4	0	1	0	0	0	1	5	0	0

表6 空間構成別 視対象の変遷

名所数

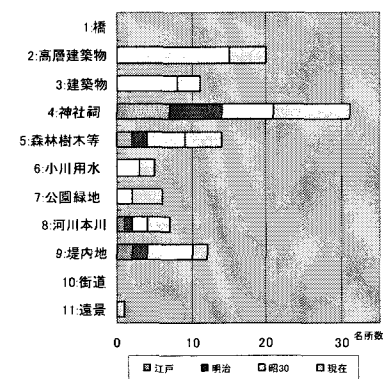


表7 空間構成B型における視対象の変遷

橋」「2:高層建築物」「7:公園・緑地」など人が居住することに伴い整備される視対象が、「昭和30年代」「現在」に加わることがわかる。また、支流の近くの位置し、大きく名所数が増加した傾向がある空間構成D型は視対象「3:建築物」は大きく増加はしているものの視対象の種類に大きな変化はないことが分かる。

(4)空間構成別の成立条件の変遷

表8は空間構成型別に名所成立要因の変遷を集計した表である。全体を通して、「江戸」から「現在」になるにつれて成立要因の種類は、幅広くなることが表から伺える。場所の資質に関わる「b:治水・災害」「c:土地の歴史」「g:風景の眺望」は、どの時代も常に成立要因である。そこに、都市開発などにより、以前を懐かしむ性質の要因と自然に関わる要因が、後の時代から価値が出てきたため成立要因に加わる傾向が理由として考えられる。

空間構成	時代	a.盛ん	b.治水	c.歴史	d.基盤	e.産業	f.施設・建	g.眺望	h.歳時	i.レク	自然	k.周囲
A型	江戸	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0
	明治	0	6	12	0	8	1	8	7	1	2	6
	昭和30	0	1	3	0	0	10	2	2	1	2	5
	現在	1	3	6	6	2	4	7	5	2	1	2
B型	江戸	0	1	9	0	1	0	5	1	1	2	2
	明治	0	6	17	0	9	1	8	7	1	5	6
	昭和30	10	4	11	0	16	13	4	7	3	11	6
	現在	3	10	12	0	0	4	3	3	2	6	2
C型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	1	1	2	0	2	0	0	0	0	0	1
	昭和30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	現在	0	0	6	2	0	2	1	1	2	2	2
D型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	2	1	0	2	0	3	0	0	0	0
	昭和30	2	1	5	2	1	2	2	0	1	5	2
	現在	1	3	6	6	2	4	7	3	2	16	2
E型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭和30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	現在	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭和30	0	0	4	0	0	0	4	0	0	3	0
	現在	0	0	3	0	0	0	3	0	0	0	2
G型	江戸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	昭和30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	現在	0	0	1	0	0	5	1	0	0	3	4

表 8 空間構成別 名所成立要因の変遷

5. 名所成立のポテンシャル評価

以上から得たデータに基づいて、現在は名所として認識されていないが、何か要素（成立条件）を加えることにより、名所となる可能性を持つ場所についての評価を行う。方法は以下に述べる3段階で行う。①空間構成の型、視対象から空間構成の骨格として名所の素質があるか確認する。②同じ空間構成の型から組み合わさる傾向のある成立要因を抽出する。③抽出した成立要因を場所の性質と照らし合わせ「場所の埋もれている魅力、潜在的な魅力」を引き出すことのできる成立要因を選択する。

例1（表10）の川崎市川崎区殿町付近は、水際まで歩いて行くことができ、都心部で野鳥が多く見られる貴重な場所である。アクセス性があまり良くないこともあり、訪れる人はまばらである。河口部や羽田空港が見渡すこともできる。視対象「森林・樹木等」「河川本川」は表7より割合は小さいがどの時代にも視対象となっていることがわかる。よって空間構成の骨格としては名所になる素質を有している。表9からこの空間構成に傾向のある名所成立要因は「b」「c」「f」「g」「j」「k」である。その中から、この場所の性質から「場所からの眺め」「野鳥や樹木など自然公園」などの魅力を引き出す整備になりうる成立要因として「c：土地の歴史」「h：歳時的イベント」「i：レクリエーション」「j：自然に親しむ」が挙げられる。例2（表10）の河港水門は、土木遺産として価値はあるものの、背後に工場があること、周囲が整備されていないこともあり名所とまでは認識されていない。この場所の視対象である「建築物」は表7から「昭和30年代」、「現

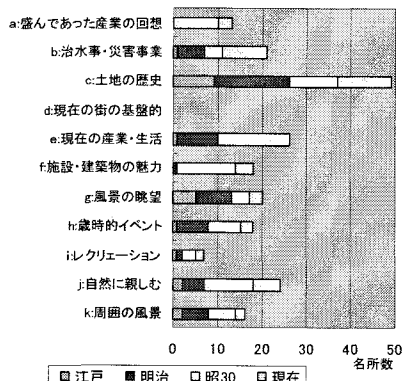


表 9 空間構成 B 型における名所成立要因の変遷

空間構成型	例1:川崎市川崎区殿町付近	例2:河港水門
B型	B型	B型
視対象	森林・樹木等 河川本川	建築物
場所の性質	・野鳥が観察できる ・自然の涼 ・江戸時代に名所である「羽田の渡し」 ・工業地帯の付近に存在 ・葦などの植生	・歴史のある水門 ・背後に工場地帯 ・アクセス性が悪い ・河川に面した場所が存在
成立要因	「c：土地の歴史」 「h：歳時的イベント」要素 例1:定期的な野鳥の観察会などを行う 「i：レクリエーション」 例1:自然公園として整備 「j：自然に親しむ」 例1:植生などをPR	「a：盛んであった産業の回想」 「c：土地の歴史」 例1:史跡、産業に関する碑、看板などを整備 「f：施設・建築物の魅力」 例1:水門の歴史などをPR 「i：レクリエーション」 例1:アクセス性を改善する
付近の写真		

表 10 ポテンシャル評価

在」と後の時代から名所となる傾向がある。「河川風景」のように浮世絵に描かれ江戸時代から認識されていたものは、性格が異なるが、人々の生活に必要な施設として作られ歴史的価値にある建物は、今後も積極的に保存されていくものもあると考えられる。よって名所になる素質を有している。「土木遺産」「産業の歴史」を魅力となりうる成立要因として「a：盛んであった産業の回想」「c：土地の歴史」「f：施設・建築物の魅力」「i：レクリエーション」が挙げられる。

6. 研究のまとめ

本研究は、過去の変遷の情報から空間構成ごとの名所成立要因、視対象を抽出した。これらの成果は、現在の場所の魅力を引き出す手法に応用できると考えられる。

【参考文献】 渡辺勝彦・内藤昌：名所の形体要素－江戸時代4都における都市景観の研究1－ 第20回日本都市計画学会学術研究論文集、pp13-18、1985 鳴海邦碩・久隆浩・大西二州：「浪花百景」に描かれた近世大阪の都市景観構造に関する研究 第23回日本都市計画学会学術研究論文集、pp223-228、1988